あいづ暮らし水景の調査研究

A2200815　佐々木かおり

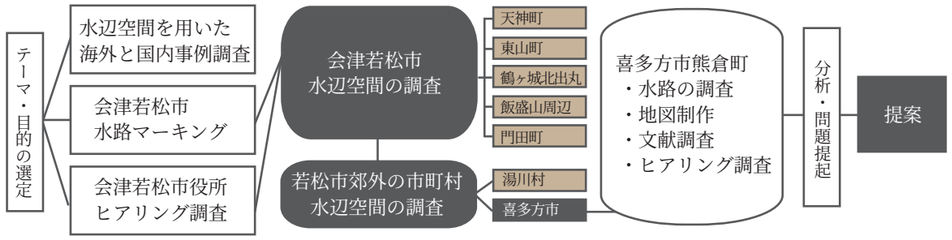
<< 研究概要 >>

会津の水辺空間がどのように形成されているのかを調査し、今後はどのように水辺空間を活用すべきなのかを考察する。

<< 研究背景・目的 >>

会津若松市を歩いていて、子どもが安心して水遊びをできるような場所や住民が憩いの場となるような水辺空間がほしいと思っていた。実際に会津若松市や市内郊外における会津地域の水辺空間の現状調査を行ってみて、人と生活が深くつながっていることを知り、現在までの水辺空間をどのように後世に残せるかを考える必要性を感じた。このことから主に生活用水路と人とのつながりに焦点を当て、会津地域の生活と水の歴史を調べるとともに、現在残っている貴重な水辺空間をどのように残すべきかを考えて再生提案を行う。

<< 研究方法 >>



<< 調査と分析 >>

海外と国内事例

自治体では、どのように水辺を生かしたまちづくりをしているのか事例調査をし、水辺空間の活用方法の参考資料として事例を挙げた。

・アメリカ テキサス州サンアントニオ「リバーウォーク」
・福岡県柳川市　「柳川市の堀割の再生」
・東京都北区　「音無親水公園」
・東京都江戸川区　「古川親水公園」
・東京都葛飾区　「水元公園」
・滋賀県高島市新旭町　「針江地区のかばた」
・宮城県　「かばた」

堀を生かしたまちづくり（福岡県柳川市）▲

会津若松市の水辺空間調査

会津若松市の河川水路を把握するために地図を作成した。それをもとに水辺を公園として利用できそうな場所を探すため現地調査を行った。会津地域には、東山町の丁寧・石山地区、門田町の徳久・一ノ堰地区などで道路沿いに野菜洗いや花の水くれなどで利用する『洗い場』があり、生活用水として水路を現在でも利用していることが分かった。

・天神町（湯川いこいの河畔公園）
・東山（院内地区、丁寧地区、石山地区）
・鶴ヶ城北出丸（会津酒造歴史館前、市役所駐車場前、白露庭）
・飯盛山周辺（さざえ堂、滝沢本陣）
・門田町（徳久地区、一ノ堰地区、会津総合運動公園）

道に沿って流れる水路のある洗い場（門田町一ノ堰）▲

会津若松市郊外市町村の水辺空間調査

湯川村の高瀬地区、喜多方市熊倉町の高柳・小沼・熊倉下、熊倉上地区の調査を行った。喜多方市の熊倉町では住宅の下に水路が流れていることがわかった。現地調査をしてみると、建物の下を水路が通っているが、農業用水路や排水路として利用されていているため、住宅内にあった水路や洗い場を閉じている家庭が多かった。熊倉地区では、昭和30年くらいまで、この水路を飲料水や食器洗いなどの生活用水路として利用していたそうだ。

現在の法律では、水路の上に住宅を建てることはできないと定められているので、建物の下にあるこの水路はとても貴重な水辺空間である。しかし近年、現代の生活にあった住宅に建て替える際に、水路の上に住宅を建ててはいけないという法律がネックとなり、以前の建物位置に新築を建てることができないという問題が発生し住民にとって頭を悩ませる要因の１つとなっている。
これらからの現地調査の結果から、熊倉地区の水辺空間について興味を持ち、会津地域でも熊倉に焦点をあててさらに研究を進めることにした。

建物下を流れる水路（熊倉町 熊倉地区）▲

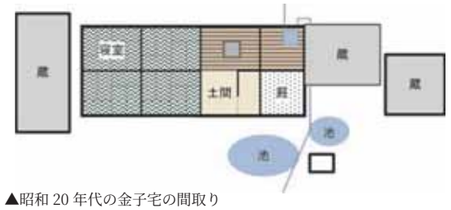
熊倉町熊倉の調査

熊倉は、現在の会津若松市と山形県の米沢市を結ぶ米沢街道にあり宿場町として栄えた歴史のある町である。現在、熊倉上 . 上地区には200軒の住宅があり、屋号を持っている住宅が多い。地区内には三本の主要水路が流れていて、農業用水路として使用されている。

【ヒアリング調査】
アンケートをもとに熊倉地区のヒアリング調査を行うと、水路を使用していた昭和20・30年代の水辺に関するエピソードを聞くことができた。特に、水路の通っている部屋で家族全員が集まって食事をしたあと、家の中にある洗い場で子どもが食器を洗ったりしていたという話は、心温まるエピソードで生活用水として水路を使用していたことがわかった。また、水路は源流が大塩川で熊倉上地区から下地区に水が流れている。各家庭に池があったため、そこに飼われていたコイが水の浄化の役割を担っていた。それから地区内に使用するルールがあったことで、さらに水のきれいさが保たれていた。

▲水路の通る住宅（熊倉上地区）

◎主な用途（昭和20年代後半まで）
・生活用水（食器洗い、野菜洗い、お風呂の水など）としての機能をもつ。
・現在の冷蔵庫に相当するもので、どぶろくや野菜等を冷やしたりして利用した。
・消火栓としての機能をもつ。



▲昭和20年代の金子宅の間取り

▲制作中の熊倉上地区水路模型

【文献調査】
「熊倉宿」の興りは慶長６年５月（１６０１）上杉氏が、熊倉を駅所と市場に定めたことによる。熊倉村が上分、下分に二分され、物江家と赤城家の在地支配のなかで、米沢街道の重要拠点として新しい村割をもった「宿場」が新設された。宿駅の開設に伴って宿内に六斎市〈月々六度の市。五日と十日が市日となる。〉が開催されるようになった。村のつくりは宿内９００ｍの内、６００ｍはほぼ一直線に建物が並んでいるが、残りはＬ字に曲がっている。鹿島神社を中心に北方を上分、南方を下分とし、村内には、水路が張り巡らされていた。中央には町堀があり、生活用水の中掘りと家々の外側を流れる排水堀があった。これら三本の主要な水路は、宿駅開設時に設計施工されていたものである。

<< 問題提起 >>

調査より会津地域には、水と人と生活が密着していたことが分かる水辺空間が数多く現存している。会津若松市では道路沿いに野菜洗いや花の水くれなどで利用する『洗い場』が残っていることや喜多方市熊倉町は、建物下に生活用水路が流れていて、家のなかに『洗い場』があり生活用水として水路を使用していたという、歴史的背景のある水辺空間が現存している。これらの洗い場は、そこに住む住民や家族のコミュニティスペースとなっていた。しかし現在では、水質汚染や生活環境の変化が要因となり『洗い場』を利用する機会が減り、その水辺そのものが埋められたり、枯渇してしまっている『洗い場』が多い。これらの背景を踏まえると、景観的にもまちのシンボルとなるような建築物や水辺空間を新たに提案するというようなハード面を考えるのではなく、人と生活が深くつながっている現在までの水辺空間をどのように後世に残すというようなソフト面を考える必要性がある。このことから、生活用水としての機能を果たしていた水路を再生して後世に残す水辺空間を提案できないかと考える。

<< 提案 >>

喜多方市熊倉町熊倉上地区において、現在も建物の下を流れている水路を活用し、後世に残す水辺空間として提案をしたい。そこには生活用水として水路を利用していた歴史を後世に伝えるような水辺空間を提案し、浄化システムを地区内に構築し、再び住民が利用できるものにする。

〈提案するスペース〉
◎空き家の活用〈野菜市 + コミュニティスペース + 農泊体験施設〉
◎空きスペースの活用〈水の浄化システムのわかる水辺
/ 水路が建物下を流れていることの分かる親水公園〉